セヴィニエ夫人の手紙にみる17世紀の女子教育
——グリニャン夫人との母娘関係を巡って——

森本　彩

はじめに

セヴィニエ夫人（1626-1696）は17世紀古典主義の黄金期を生きた書簡作家である。

1671年2月、娘の夫の地方総督補佐官就任に伴い娘夫妻がプロヴァンス地方に旅立った時から、母セヴィニエ夫人と娘グリニャン夫人（1646-1705）との文通が始まった。週2回（のちに3回）の定期便を利用し、互いの手紙が届くのに1週間かかるやりとりが以後23年間続くこととなる。パリ（又はセヴィニエ家の城館のあるブルターニュのレ・ロシェなど）に住むセヴィニエ夫人からプロヴァンスに住むグリニャン夫人への凡そ800通の書簡には、「忠告」や「助言」といった教育的な要素が随所に見られる。夫人は手紙の文中に寓話の一節や演劇の登場人物、及びその台詞を引用して娘の行動や生活態度を諫め、励ます。母も娘も古典諸作品をそらんじているため二人の以心伝心は成立しており、和歌における本歌取りの如く、作品の解説や註釈は無用である。17世紀において豊かな教養を身に付けた貴族の子女達のみに限られていたこのような貴重な教育的アドバイスは今日の私たちにとっても大いに傾聴に値し、又そこから家庭および学校教育の参考にもなる理念を読み取ることができよう。実際、セヴィニエ夫人の没後に祖母の書簡集を出版した孫娘のポーリーヌ・ド・シミアーヌ夫人も、1726年書簡集のルーアン本 l'édition de Rouen に収録された、彼女の従兄でビュッシー・ラビュタンの長男アメ・ニコラへの手紙のなかで次のように述べている。

> Ces lettres sont d'ailleurs remplies de préceptes et de raisonnements si justes et si sensés, avec tant d'art et d'agréments, que leur lecture ne peut être que très utile aux jeunes personnes et même à tout le monde.(1)

それにしても、今日プレイヤード版全3巻に収められた『手紙』*Correspondance* が、セヴィニエ夫人と娘グリニャン夫人との往復書簡集でないのは残念なことである。娘は毎回真面目に母と同じペースで返事の手紙を送った。しかしグリニャン夫人の手紙は、弟シャルル宛てや、母の従兄弟伯父であるビュッシー・ラビュタン宛てのものはこの書簡集に収録されているのに、驚くべきことに母セヴィニエ夫人宛てのものは一通も残されていないのだ。グリニャン夫人の手紙は、夫人の娘のシミアーヌ夫人が、祖母の手紙同様に母の手紙も出版されることを恐れて処分したとされる。プレイヤード版の校訂者ロジェ・デュシェーヌによれば、1754年のペラン Perrin 新版の前書きには「グリニャン夫人の手紙はもはや存在いたしません。それらは（シミアーヌ夫人から母グリニャン夫人への）敬愛による心の咎めにより処分されております。」と書かれているが、真相はいまだ不明のま

までであるという[(2)]。

そこで本稿のⅠ．では、先ずセヴィニエ夫人の書簡集出版までの過程におけるグリニャン夫人の手紙の消失と、母セヴィニエ夫人との母娘関係についてみていきたい。

Ⅱ．では、手紙の中から忠告や助言などの教育的要素を含むものを抽出し、セヴィニエ夫人独自の教育観について考えてみたい。

Ⅰ．グリニャン夫人の手紙消失とセヴィニエ夫人との母娘関係

私達が今日、セヴィニエ夫人から娘宛の夥しい数の手紙を読むことができるのは、母の手紙を大切に保管しておいた娘グリニャン夫人、そしてそれらを引き継ぎ、後に仕分け整理して出版にこぎつけた孫娘、ポーリーヌ・ド・シミアーヌ夫人の尽力に負うところが大きい。セヴィニエ夫人の書簡集は没後出版であり、夫人自身は出版の意志は無かった「心ならずもの作家」écrivain malgré elle と言われる。たしかに夫人の手紙は、サロンの友人たちなど、限られた仲間の範囲内で回し読みされたことはあったものの、彼女が亡くなった時点では1通たりとも印刷はされていない。しかし夫人の晩年の手紙の中には「誰かが私を裏切って書簡集が出版されることはないかと恐れています[(3)]」という記述がある。夫人は出版を拒絶しながらも、ある程度起こり得ることと考えていたのかもしれない。

最初にセヴィニエ夫人の手紙が世に出たのは、従兄のビュッシー・ラビュタンが1693年に亡くなった後に、彼の息子アメ・ニコラと娘コリニ夫人が父の回想記と書簡集を2巻本で公刊した時で、そこに従妹セヴィニエ夫人からビュッシー宛ての手紙が5通含まれていた（1696年）。翌97年には書簡集 *Lettres de M. Roger de Rabutin, comte de Bussy*（全4巻）が公刊され、そのうち2巻はビュッシーとセヴィニエ夫人との往復書簡集であった。この書簡集に含まれたセヴィニエ夫人、グリニャン夫人それぞれからのビュッシー宛ての手紙、特にセヴィニエ夫人からのものが読者の賞賛を浴びた。その後アメ・ニコラと、グリニャン夫人の娘ポーリーヌ・ド・シミアーヌ夫人との手で手紙の蒐集が進められ、四半世紀以上経った1725年、『セヴィニエ侯爵夫人が娘のグリニャン夫人に宛てた書簡選 - ルイ14世物語満載 *Lettres choisies de Mme la marquise de Sévigné à Mme de Grignan, sa fille, qui contiennent beaucoup de particularités de l'histoire de Louis XIV*』（全75ページ）が刊行され（セヴィニエ夫人の手紙28通掲載）、翌26年に次の版（全2巻、134通掲載、非合法出版）（l'édition de Rouen）が刊行され、かなりの評判を呼んだ。

そして1734年にはポーリーヌ・ド・シミアーヌ夫人の依頼で最初の合法的出版が行われた（『セヴィニエ侯爵夫人が娘のグリニャン伯爵夫人に宛てた書簡選 -*Recueil des lettres de Madame la Marquise de Sévigné à Madame la Comtesse de Grignan, sa fille*』全4巻、l'édition de Perrin、37年に2巻追加、計614通、翌38年増補版 計772通）。デュシェーヌによれば、アメ・ニコラ主導で蒐集が行われていた時分にポーリーヌが「祖母の手紙に母の返信を加えてはどうか」という案を出しアメ・ニコラの

意向を打診したこともあったという[4]。しかしその時点ではグリニャン夫人の手紙の所在は不明であった。当然のことながら手紙というものは差出人の手を離れ受取人に渡るものであるから、過去にグリニャン夫人によりプロヴァンスから差し出された手紙は、それらをパリやブルターニュなどで受け取ったセヴィニエ夫人の手元にあったはずだ。デュシェーヌは「セヴィニエ夫人自身が晩年に、娘の手紙が人手に渡ることを恐れて処分したのかも知れない」と憶測する。

一方、娘のグリニャン夫人は何故、母からの手紙を保管しておいたのか。その理由は、書簡集出版の可能性のためではなく、彼女が少女時代に修道院で生活していた時分に母から送られてきた手紙をとっておいた時と同じく、親への孝心によるものであるとされる[5]。

以上のような理由で、私達読者はセヴィニエ夫人からグリニャン夫人への一方通行の手紙の文面のみから、グリニャン夫人の母への手紙がどんなものであったのかを推理しながら読まなければならないのだが、セヴィニエ夫人の手紙には、時折グリニャン夫人の返信の冷たさを嘆く内容が出てくる。陽気で社交的で愛情あふれた母セヴィニエ夫人と、その陰にあって、世間からも母からも顧みられないという劣等感と嫉妬に苛まれていたという娘グリニャン夫人との母娘関係にはどのような背景があったのかを考えてみたい。

グリニャン夫人（幼名フランソワーズ･マルグリット）が5才の時､浮気性で浪費家の父アンリ･ド･セヴィニエは、当時「美しいロロ」とよばれたゴンドラン夫人をダルブレ騎士と奪い合う決闘に敗れあっけなく命を落とした。多額の借金を残したこの父のスキャンダラスで早過ぎる死の現実を乗り越えられなかったことが娘の精神に暗い影を落とし、のちの彼女の精神の不均衡の決定的な要因となる。人々の陰口はとどまるところを知らず、彼女にとって父の死は、恥であると共に家族の遺棄に等しかった。実は母のセヴィニエ夫人も幼少時に両親を亡くし孤児となっているが、幸運にも母方の賑やかな親戚一族に引き取られ、熱烈な歓迎を受けて育った。フランソワーズは、母の少女時代のように屈託のない大勢の従兄妹に囲まれることもなく、弟のシャルルはいたものの、孤独な子供時代を過ごした。フランソワーズは9才の時､母の友人ポンポンヌ M.de Pomponne に自らを「私は囚われ人です。お父さまの家(王国)から追い出されてしまったお姫様なのです」と言ったという[6]。父の死後、家庭における父親の保護が欠落した結果、娘は父の不在を補う為に何らかの道徳性を渇望するようになり、そのためには他の家庭の子供達のように父親を尊敬する必要があった。そこでフランソワーズは亡父アンリの死の恥辱を自分自身に投げ返し、又、父の過ちの本質をも自分自身に集中させた。こうして罪責感に苛まれた不幸なフランソワーズは僅か9才にして自らを「父の王国から追い出された姫であり、囚われ人」と名乗るようになってしまったのだ[7]。

いっぽう母のセヴィニエ夫人のほうは、のちに齢六十を過ぎた頃に自らの寡婦生活を振り返り、従兄のビュッシー・ラビュタンへの手紙で「私は自分の本当の誕生日は忘れて、十分に楽しく十分に幸せな寡婦生活の始まりを、私の生まれた日としたいです」と述懐している[8]。又、1690年のフルリュスの戦いの後には、おなじくビュッシー宛の手紙に「これら戦死者たちの若い未亡人が嘆く

にはあたりません。かの女たちは自分自身の主人になって、あるいは主人を切り換えることができて、おおいに幸せなのですから[9]」と書いている。セヴィニエ夫人は若くして未亡人になったことで、あくまでも夫の従属物として補助的な役割しか与えられなかった他の貴族の夫人達と違い、独身生活を享受しサロンに出入りし、娘への手紙を書くことで言論の自由をも得たのだ。しかし娘フランソワーズは、自分にとって唯一の規範であり支柱であるはずの母親が社交界で華やかに振舞い称賛される姿に反発と劣等感を覚え、「檻に閉じ込められた囚われ人」のように外界との接触を避けた。向こう見ずな父の死は、孤独な娘を取り返しのつかないほどに打ちのめし、生涯内向的な性格にしてしまったのである。

美しい娘に成長したフランソワーズはダンスの名手で、17才から19才の間に宮廷バレエでルイ14世の相手を3回つとめ[10]、王の寵姫の一人になるのでは、と噂された[11]。しかしフランソワーズは社交的で陽気な母親の性格とは打って変わって無頓着な娘であったし、セヴィニエ夫人も固い道徳的信条を持っていたので、母娘はこの社交界の噂を退けたのであった[12]。フランソワーズが20才当時、ラ・フォンテーヌは、彼の寓話「恋するライオン」の冒頭で彼女の美に賛辞を送っている。

> À MADEMOISELLE DE SÉVIGNÉ　Sévigné, de qui les attraits Servent aux Graces de modèle, Et qui nâquites toute belle, À votre indifférence près, Pourriez-vous être favorable Aux yeux innocents d'une Fable, Et voir, sans vous épouvanter, Un lion qu'amour sut dompter?[13]

文中の無頓着 indifférence とは、この寓話が発表される前年に、フランソワーズ自身が王の寵姫と目された噂を退けた、という無頓着さを表している。

フランソワーズは1669年1月、22才でプロヴァンス地方の名門の家柄のグリニャン伯爵と結婚する。セヴィニエ夫人にとってグリニャン伯爵は、最愛の娘を嫁がせる相手としては体格は良いが美男ではなく、娘より14才年上、既に2人の妻と死別しており最初の妻（ランブイエ夫人の娘）との間に2人の娘があり、そのうえ借金まみれ、という難はあった。しかし素晴らしい館と広大な土地を持つ大貴族であり、又、任地に赴く必要はなく、娘夫妻はパリのロワイヤル広場のセヴィニエ夫人の館で共に暮らせるということになっていた。しかしグリニャン伯爵がプロヴァンス地方の総督補佐官 lieutenant général に昇進し、当時の地方総督が16才の未成年者だったので後見のため任地に居住しなければならなくなり、1671年2月に娘夫妻はプロヴァンスに旅立ってしまう。ここに「娘との別離」という、夫人にとっての最大の誤算が起き、悲嘆にくれながら書き綴った手紙によって、没後に期せずして大作家セヴィニエ夫人が誕生するわけである。

しかし、最愛の娘との別離という耐えがたい苦悩を被ったものの、セヴィニエ夫人はフランソワーズを伯爵夫人にするという夢を成し遂げた。デュシェーヌは、セヴィニエ夫人は「娘を自分の分身にし、宮廷において自分が成し遂げられなかった成功を収めさせたい」という熱望と苦悩を抱く母

親だったと指摘する。そして夫人の計画は、娘を宮廷バレエでデビューさせた時から始まっていたというのだ[14]。幼少時に両親を亡くしたセヴィニエ夫人は、自分自身が短期間しか持ち得なかった「母親」という存在の役割を全うすべく、娘に家庭教育を授け育て上げて大貴族に縁付け、その後も娘夫婦を王に引き立ててもらうこと、すなわち宮廷での娘の地位を可能な限り向上させる目的の為に、自らも宮廷に出入りし社交に励んでいたと言えるであろう。

Ⅱ. セヴィニエ夫人の教育観

17 世紀は、デュ・ボスク、グルナイユ、フェヌロンなどの聖職者らによる女子教育論が次々と出版され話題を呼んだ時代でもあった。おそらくセヴィニエ夫人の助言の手紙の背景にも、当代の女子教育論、知育擁護論が一般通念として流れていると思われる。そこで本項では、当時急速に普及しつつあった修道院教育、又、フランス語（国語）教育や外国語教育について、当時の社会事情や女子教育論者達の意見と照合・比較しながら、夫人の教育観について考えて行く。

1. 修道院教育

グリニャン夫人には一男二女の三人の子供があるが、祖母セヴィニエ夫人は、殊に二女ポーリーヌの教育に関して数多くの助言や説得の手紙を書いている。セヴィニエ夫人は修道院教育に大反対である。しかしグリニャン夫人は母の助言をものともせず、娘達を修道院教育に委ねた。先ず「ポーリーヌを修道院に入れないように」と警鐘を鳴らすセヴィニエ夫人の手紙を引用する。

À Livry, mercredi 21 juillet 1677

Aimez, aimez Pauline. Donnez-vous cet amusement. Ne vous martyrisez point à vous ôter cette petite personne. Que craignez-vous? Vous ne laisserez pas de la mettre en couvent pour quelques années, quand vous le jugerez nécessaire. Tâtez, tâtez un peu de l'amour maternel ; on doit le trouver assez salé, quand c'est un choix du cœur, et que ce choix regarde une créature aimable.[15]

上の手紙の 3 年後の 1680 年から、グリニャン夫人は自身の 8 年にわたる長いパリ滞在の間、ポーリーヌを 6 才から 14 才まで修道院に預けたが、88 年に「やっと生家に戻った孫娘を、今後は修道院ではなく家庭で母親が教育するように」とセヴィニエ夫人は必死に説得する。

À Paris, lundi 26 octbre 1688

Elle vous adore, et au milieu de la joie de vous voir, sa soumission à vos volontés, si vous voulez qu'elle vous quitte, me fait une pitié et une peine extrêmes, et j'admire le pouvoir qu'elle a sur elle. Pour moi, je jouirais de cette jolie petite société, qui vous doit faire un amusement et une occupation. Je la ferais travailler, lire de bonnes choses, mais point trop simples ; je raisonnerais avec elle, je verrais de quoi elle

est capable, et je lui parlerais avec amitié et avec confiance. Jamais vous ne serez embarrassée de cette enfant ; au contraire, elle pourra vous être utile. Enfin j'en jouirais, et ne me ferais point le martyre, au milieu de tous ceux dont la vie est pleine, de m'ôter cette consolation.[16]

ポーリーヌの教育に関する説得は、娘グリニャン夫人への母性愛と同様に、セヴィニエ夫人の書簡集全体に流れるライトモチーフの一つとなって行く。ポーリーヌには姉マリー・ブランシュ（1670-1735）がいるが、彼女は5才で親元を離れてエクスのサント・マリ・ド・ラ・ヴィジタシオン修道院に入れられ、生涯そこを出ることはなかった。財政が破綻状態にあったグリニャン家にとって家名を継ぐ嫡男であるルイ・プロヴァンス（1671-1704）の立身の為、グリニャン夫妻はマリー・ブランシュを本人の意志と関係なく修道女にしてしまったわけであるが、このことを祖母は「苦しみ」martyre[17]と呼び、憐憫の情を寄せる。実はセヴィニエ夫人自身も過去に、自分が受けたことのない修道院教育を娘フランソワーズ（後のグリニャン夫人）に受けさせた。その当時の自分が娘の教育を修道院に委ねてしまったという「蛮行」barbarie を悔いたのが、上記の手紙から12年遡る1676年の手紙である。

À Paris, mercredi 6e mai 1676

J'ai le cœur serré de ma petite-fille ; elle sera au désespoir de vous avoir quittée et d'être, comme vous dites, en prison. J'admire comme j'eus le courage de vous y mettre ; la pensée de vous voir souvent et de vous en retirer bientôt me fit résoudre à cette barbarie, qui était trouvée alors une bonne conduite et une chose nécessaire à votre éducation.[18]

セヴィニエ夫人は、当時大部分の親達がそうしたように、娘フランソワーズをナントにあるサント・マリ修道院女学校に入れた。しかしそれは「おそらく1658年（フランソワーズが12才当時）のことで、短期間の滞在の後に、母親が娘への愛と別離の寂しさから娘を家へ連れ戻した。」編年史において、修道女たちはセヴィニエ夫人の自己本位的な行動を証言する[19]。

フランソワーズが主として受けた教育はセヴィニエ夫人自身が受けたものと非常に似ており「家庭において、会話と読書をベースにした」もので、イタリア語やスペイン語を学び小説や詩を読み、極めて当代的な教養を身に付けた。彼女の家庭教師でセヴィニエ夫人の親友でもあるデカルト主義者ピエール・ド・ラ・ムッス僧院長の影響でフランソワーズもデカルト主義者となり、母も娘への手紙文中でたびたびデカルトを「あなたのお父様」votre père Descartes と表現する[20]。

セヴィニエ夫人は修道女達の無能さを指摘し、自分が受けた教育であり、娘にも授けた「母親のそばで」の教育を再度薦める。

À Paris, lundi 24 janvier 1689

> Ah! ma fille, gardez-la auprès de vous ; ne croyez point qu'un couvent puisse redresser une éducation, ni sur le sujet de la réligion, que nos sœurs ne savent guère, ni sur les autres choses. Vous ferez bien mieux à Grignan, quand vous aurez le temps de vous appliquer. Vous lui ferez lire de bons livres, l'Abbadie même puisqu'elle a de l'esprit. Vous causerez avec elle. M. de La Garde vous aidera. Je suis persuadée que cela vaudra mieux qu'un couvent.(21)

以上のようなセヴィニエ夫人の修道院教育への見解を裏付ける理論として、フェヌロンの『女子教育論』*Le traité de l'éducation des filles* の最終章の後に付された「娘の教育について、身分ある夫人への忠告」の一部を引用する。

> [...] le plus sûr parti pour les mères est de confier aux couvents le soin d'élever leurs filles, parce que souvent elles manquent des lumières nécessaires pour les instruire; [...]Il n'en est pas de même de vous, madame : [...]ainsi je vous excepte de la règle commune, et je vous préfère, pour son éducation, à tous les couvents. [...]mais, si cette fille sort de ce couvent et passe, à un certain âge, dans la maison paternelle, où le monde aborde, rien n'est plus à craindre que cette surprise et que ce grand ébranlement d'une imagination vive. Une fille qui n'a été détachée du monde qu'à force de l'ignorer, et en qui la vertu n'a pas encore jeté de profondes racines, est bientôt tentée de croire qu'on lui a caché ce qu'il y a de plus merveilleux. Elle sort du couvent comme une personne qu'on aurait nourrie dans les ténèbres d'une caverene et qu'on ferait tout d'un coup passer au grand jour. Rien n'est plus éblouissant que ce passage imprévu et que cet éclat auquel on n'a jamais été accoutumé. [...] J'estime fort l'éducation des bons couvents; mais je compte encore plus sur celle d'une bonne mère, quand elle est libre de s'y appliquer. Je conclus donc que mademoiselle votre fille est mieux auprès de vous que dans le meilleur couvent que vous pourriez choisir.(22)

修道院教育の是非について、娘を一時的にその教育に委ねたセヴィニエ夫人、そして、修道院教育を実践しその効果をつぶさに見てきたフェヌロンの「上流社会の娘達にとって、教育に必要な知識を備えた母親がいるのであれば、修道院ではなく家庭で立派な母親によって育てられた方がよい」という意見の一致をここに見ることができる。フェヌロンが『女子教育論』を著したのは 1687 年のことであるから、折しもグリニャン家においてはポーリーヌが修道院から帰宅した前年であり、年代も合致している。

しかし、果たしてこの二人の修道院教育に対する見解は、当時の貴族社会の通念であったのか。バダンテールは「17、18 世紀とくに 18 世紀には、ブルジョワや貴族の子どもの教育はつねに、三つの異なる段階からなる、ほとんど同じ慣習に従っていた (23)。」と言う。三つの段階とは母親による三つの放棄行為、すなわち子どもは生まれてすぐに里子に出され、4 ～ 5 才で自分の家に戻り、初めて両親に出会うと今度は 7 才まで家庭教師の手に委ねられ、8 ～ 9 才になると教育を受けさせる為に

寄宿学校に出されたというのだ。子どもが女の子の場合は修道院学校に入れられ、家に戻って来た時、両親の頭の中には「結婚させて追い払うこと」という一つの考えしかなかった。又は貧しい娘達の場合はもし夫が見つからなければそのまま修道院に残って修道女になってしまうことも珍しくなかったのである。又、デュロンは「17世紀の人々は他人の同情を引いて悲しげな様子を見せはしなかった[24]」と言う。粗悪な衛生状態のため出生児の半数は成人に達しなかったこの時代の人々はある種の自衛手段として、いつ消えるかわからない脆弱な存在である子供には愛着心を寄せなかったし、夫婦愛や母性愛、父性愛も、表に出して人に見せつける感情ではなかったという。

以上のような17世紀の子どもの地位に鑑みると、母親が自らの生命の危険さえ冒して産んだ子どもという存在を、出産直後からいとも簡単に手放して育児を他人任せにした後、教育という大義名分のもとに、成人に近い年令まで「厄介払い」するのはごく普通のことであり、そこに罪悪感という感情は微塵も存在しなかったのだ。したがってグリニャン夫人が娘達に対して選んだ「修道院教育」という方法は貴族家庭ではごくありふれた、社会通念に沿ったことであったと言えよう。それよりも、娘に修道院教育を受けさせた事をいたく後悔し、孫達がそこで教育を受けたり生涯を過ごしたりすることを知って悲嘆にくれるセヴィニエ夫人の方が、当時としては特異な考えを持っていた人間であったと考えられる。夫人の孫達への視線は深い愛情に満ちたものであり、そこにはまるで少子化した現代社会における祖母達が娘や孫に対して持つのと同種の愛を見るかのようである。セヴィニエ夫人の手紙にはまさに、近代的な家族感情の萌芽が示されていると言えるであろう。

2. フランス語（国語）教育

14才で修道院から自宅へ戻ったポーリーヌを、グリニャン夫人は家庭で教育することに決める。ここでは母国語であるフランス語教育についての祖母セヴィニエ夫人の助言を読むとともに、当時の女子教育においてフランス語の読み書き及び文法学習にどの程度のレベルが求められていたのかを、フェヌロンの意見を参考にみていく。

グリニャン夫人は平素から健康状態に波があり頭痛や腹痛が多く、常にセヴィニエ夫人を心配させている。体調が悪い時に娘のポーリーヌに口述筆記をしてもらうことがあるが、セヴィニエ夫人はその「書き取り作業」をすることが同時にポーリーヌがフランス語（国語）を学ぶことにもなっていると考えている。ディクテをさせることによる孫娘への教育効果を指摘した手紙二通を以下に引用する。

Aux Rochers, mercredi 1er juin 1689

i) Pauline est trop heureuse, ma chère enfant, d'être votre secrétaire. Elle apprend à penser, à tourner ses pensées en voyant comme vous lui faites tourner les vôtres. Elle apprend la langue française, que la plupart des femmes ne savent pas; vous prenez la peine de lui expliquer des mots qu'elle n'entendrait jamais, et en l'instruisant de tant de choses, vous faites si bien qu'elle soulage votre tête et la mienne, car mon esprit

est en repos quand vous y êtes. L'ennui de dicter n'est point comparable à la contrainte d'écrire. Continuez donc une si bonne instruction pour votre fille, et un si grand soulagement pour nous.(25)

À Chaulnes, 24 avril 1689

ii) Ma fille, il n'y a que Pauline qui gagne à votre mal de tête, car elle est trop heureuse d'écrire tout ce que vous pensez, et d'apprendre à haïr sa mère comme vous haïssez la vôtre. Elle voit que vous me déclarez que, pour vous bien porter, il faut nécessairement que vous ne m'aimiez plus.(26)

i) では家庭における国語の教育について、作文をさせる等のお仕着せの授業をするのではなく子供の関心に合わせた会話中心の授業にすべきであるという助言を読み取ることができる。ii) においてはセヴィニエ夫人は書き取りの教育効果を、孫娘が自分の母親の思考を知ると同時に、「母娘関係の連鎖」を知ることだと説いている。母親のもとで育ち母親の意志や信念に沿う形で生きて来た娘は、大人になってから「自分の人生は母親の思考にコントロールされて来たのではないか」という不安に陥る。それでもなお母親から指図を続けられると、娘は自らの神経をすり減らさない為の自衛策として母親を遠ざける。母親の方は娘の態度の変化を感じ、「自分は娘に嫌われているのではないか、娘に見捨てられるのではないか」という不安にかられるのだ。孫娘ポーリーヌは祖母から母への手紙を読み、又母から祖母への手紙を代筆することによって、この普遍的ともいえる母娘関係の繰り返しをも自然に学んで行ったであろう。

家庭における国語教育へのフェヌロンの助言はどうであろうか。以下に引用する。

Le moins qu'on peut faire des leçons en formes, c'est le meilleur; on peut insinuer une infinité d'instructions plus utiles que les leçons mêmes, dans des conversations gaies.[...]Remarquez un grand défaut des éducations ordinaires : on met tout le plaisir d'un côté,et tout l'ennui de l'autre;tout l'ennui dans l'étude,tout le plaisir dans les divertissements.[...]C'est la sujétion et l'ennui qui donnent tant d'impatience de se divertir. Si une fille s'ennuyait moins à être auprès de sa mère, elle n'aurait pas tant d'envie de lui échapper pour aller chercher des compagnies moins bonnes.[...]Apprenez à une fille à lire et à écrire correctement. Il est honteux,mais ordinaire,de voir des femmes qui ont de l'esprit et de la politesse, ne savoir pas bien prononcer ce qu'elles lisent; [...]Elles manquent encore plus grossièrement pour l'orthographe,ou pour la manière de former ou de lier les lettres en écrivant :au moins accoutumez-les à faire leurs lignes droites, à rendre leur caractère net et lisible.Il faudrait aussi qu'une fille sût la grammaire; [...]accoutumez-les seulement sans affectation à ne prendre point un temps pour un autre, à se servir des termes propres, à expliquer nettement leurs pensées avec ordre,et d'une manière courte et précise.(27)

1635年のアカデミー・フランセーズ創立後のフランス語とその文法の教育はどのようなものであったのか。アリエスによれば「当時現れた文法書と辞書は、教室用の書物ではなかった。それは、上

流社会の人びと、サロンや宮殿人たち、セヴィニエ夫人やパトリュ弁護士といった人びとに向けて書かれた」のであり、当時のコレージュの教育は常にラテン語で行われ「フランス語はラテン語に次いで教育のなかにひそかに侵入していったのだが（中略）17世紀のフランス文学と文法とが体系的な教育の対象となるのは、大革命期、19世紀初頭のことであった[28]。」という。母国語であるにもかかわらず、17世紀にフランス国民が受けていたフランス語教育は、ラテン語の二次的な言語としてのものであったのだ。したがって、フェヌロンが伝える当時の女子たちの国語能力の惨憺たるさまは当然のことであったのだろう。

3. イタリア語の習得

17世紀の貴族・ブルジョワジーの男子が通ったコレージュの教育は、偏重ともいえるほど尊ばれたラテン語中心の人文古典学習重視のものであったが、セヴィニエ夫人の場合はラテン語は習わなかった。男子と違い、なぜ貴族の女子にイタリア語、スペイン語教育を受けた例が多く見られるのだろうか。この二つの言語のうち特にセヴィニエ夫人が手紙の文中で、頻繁にその教育について言及していたイタリア語の学習とその意義についてみていく。

セヴィニエ夫人は幼少時からイタリア語を習得しており、自らの貴族性を保つために読み続ける努力をしている[29]。次の引用は、ブルターニュ州ヴィトレの郊外レ・ロシェにあるセヴィニエ家の領地の館に滞在していた当時45才のセヴィニエ夫人が娘グリニャン夫人へ書いた手紙の中の一部分である。

Aux Rochers, dimanche 21e juin 1671

> Nous lisons fort ici. La Mousse m'a prié qu'il pût lire Le Tasse avec moi.Je le sais fort bien parce que je l'ai très bien appris ; cela me divertit. Son latin et son bon sens le rendent un bon écolier, et ma routine et les bons maîtres que j'ai eus me rendent une bonne maîtresse.[30]

この引用は、書簡集の中で唯一、セヴィニエ夫人自身が受けた教育についての言及が含まれる箇所である。それが最後の「手ほどきを受けてきたよい家庭教師達のおかげで、私はよい家庭教師となっているのです」という箇所である[31]。この文面から、貴族家庭に生まれ育ったセヴィニエ夫人と前出のラ・ムッス僧院長（セヴィニエ夫人の親友でグリニャン夫人の元家庭教師）が少年少女時代にそれぞれに受けたイタリア語・ラテン語の教育と、彼らがこの手紙の書かれた当時の年齢まで維持し続けていた高い言語能力を窺うことができる。そして、セヴィニエ夫人が受けたイタリア語教育が家庭教師によるものだったこともわかる。

セヴィニエ夫人は娘グリニャン夫人にも自らイタリア語教育を授けているが、是非ポーリーヌにも母親がイタリア語を教えるように、と勧める。

Aux Rochers, dimanche 16 octobre 1689

Elle saura dans un moment l'italien, avec une maîtresse bien meilleure que n'était la vôtre. Vous méritiez bien, ma chère enfant, d'avoir une aussi parfaitement aimable fille que celle que j'avais. Je vous avais bien dit que vous feriez de la vôtre tout ce que vous voudriez par la seule envie qu'elle avait de vous plaire; elle me paraît fort digne de votre amitié.(32)

女子がイタリア語を習得することの意義については、先ずフランソワ・ド・グルナイユ François de Grenaille の著書『オネット・フィーユ』*L'honneste fille*、続いてフェヌロンの『女子教育論』からイタリア語学習についての部分を引用する。

(Grenaille)

[...]Quant aux autres langues modernes j'ay tousjours jugé que l'Italienne devoit estre celle des Reynes, veu que la douceur s'y accorde parfaitement avecque la Majésté. Ne dissimulons point la gloire des estrangers puis qu'elle nous est utile. Il faut avouer que les Autheurs de cette Nation ont des charmes particuliers dans leurs expressions. Ils ont de la secheresse et de l'abondance, de la gentillesse et de la severité, de la mignardise et de la force. Nostre esprit neanmoins doit prendre garde à ne se pas rendre effeminé pour se rendre trop agreable, et en apprenant le langage des Italiens, n'aprenons pas leurs imperfections. Ils regnent encore sur les cœurs comme ils regnoient autrefois sur les libertez des hommes. Ils nous ramolissent en nous polissant.(33)

(Fénelon)

On croit d'ordinaire qu'il faut qu'une fille de qualité qu'on veut bien élever apprenne l'italien et l'espagnol;mais je ne vois rien de moins utile que cette étude, à moins qu'une fille ne se trouvât attachée auprès de quelque princesse espagnole ou italienne, comme nos reines d'Autriche et de Médicis.D'ailleurs ces deux langues ne servent guère qu'à lire des livres dangereux et capables d'augmenter les défauts des femmes; il y a beaucoup plus à perdre qu'à gagner dans cette étude. Celle du latin serait bien plus raisonnable :car c'est la langue de l'Église. [...]Ceux mêmes qui cherchent les beautés du discours en trouveront de bien plus parfaites et plus solides dans le latin que dans l'italien et dans l'espagnol, où règne un jeu d'esprit et une vivacité d'imagination sans règle.(34)

グルナイユがイタリア語の有用性を肯定し、この言語が持つ雅びやかさや、文語表現の豊かさという魅力を説いている(35)のに対し、フェヌロンは、一般に貴族家庭の女子がイタリア語を学ぶ傾向にあることは認めるものの、その有用性を否定する。彼は、外国語学習をする先にある目的が、その語で書かれた書物を読むことや独自の文化や国民の思想・価値観を知るということではなく、将来

就く仕事で使うツールとしてのそれでなければ無意味であるという。語学の有用性だけに重きを置くか否かという問題において、この二人の主張は相反するが、グルナイユの著書（1640）とフェヌロンの著書（1687）の出版年には47年もの隔たりがあり、ほぼ半世紀後にフェヌロンがグルナイユに反論した形となったことを付け加えておきたい[36]。

又、グルナイユは、イタリア人達の不完全さ leurs imperfections、フェヌロンは、イタリア語やスペイン語を支配する精神の遊戯と規律のない想像力の活発さ un jeu d'esprit et une vivacité d'imagination sans règle を、「学ぶべきでない点」として挙げるが、果たしてこれらは両言語学習のマイナス面なのであろうか。セヴィニエ夫人自身が両言語から受けたと考えられる影響から考えてみたい。セヴィニエ夫人は情熱的なイタリア歌曲が好きで人前で良く歌った。又、娘と共にイタリアの詩人ペトラルカのソネを愛読する[37]。彼女の従兄で文筆家でもあるビュッシー・ラビュタンは1685年にポルトレ portrait において彼女を「父親譲りの活発さと陽気さがあった、でも父よりずっと礼儀正しかった」と紹介し、又「[…] このこと（娘フランソワーズをグリニャン伯爵に嫁がせたこと）が、彼女がフランソワーズに為した最も大きな財産ではない。彼女が娘に与えた良い教育 la bonne nourriture と手本は、王達でさえ、常に彼らの子どもに与えられるとは限らない宝物なのだ。」と賞讃する[38]。そして、活気に溢れてはいるがわざとらしさのない彼女の文体を「でもこの簡単さがとても難しいのだ」ma questo facile è quanto difficile. とイタリア語で評する。

グルナイユが指摘する、イタリア語を学ぶことによって陥りやすい、過度に心地よく trop agréable、軟弱な efféminé 状態は、一方ではビュッシーの言うセヴィニエ夫人の活発さ vivacité や、陽気さ enjouement という魅力を生む要素になるとも言えるのではないだろうか。セヴィニエ夫人の書簡を通して見えてくる彼女の社交的で天衣無縫な性格、話すように書く奔放な文体にこそ、イタリア語学習の多大な影響および恩恵がみられると言えるのではないか。夫人にとってイタリア語は、フランスに先駆けて華やかなルネッサンスの芸術文化が花開いた文化的先進国の言葉であり、夫人は詩の朗読や歌曲の歌唱などを通じて活発で陽気な人格をも培った。そして自らが受けた文化的・人格的恩恵を是非、孫や子にも伝えたかったのだと結論づけることができるであろう。

4. 読書について、孫娘への読書指南

セヴィニエ夫人（幼名マリ Marie）は、幼少時から大の読書家である。一人娘のマリは誕生の翌年父を戦死で、7歳の時母を病気で亡くして孤児となり、母の実家クーランジュ Coulanges 家にひきとられた。クーランジュ家は、三十年戦争の際ピカルディー地方の軍隊への軍事調達で大儲けした後に塩税の徴税請負官となり地位と財産を築いた裕福な新興貴族で、子供の教育費（書物代や家庭教師代を含む）を惜しまず、親類縁者の多い大家族であり、マリは叔父や家庭教師からスペイン語、イタリア語を学び「よき身分の家庭の娘にふさわしいさまざまな書物」に親しんだ[39]。このことから、セヴィニエ夫人の少女時代は、修道院教育も受けず、男子の通ったコレージュで行われていたラテン語や修辞学教育も受けなかったが、集団生活や学事日程に縛られることなく家庭でたくさんの本を読み、コレージュ卒のよき家庭教師達の指導を受けたことで「非常に効率よく幅広い教養を身に

付けた」といえるであろう。夫人は過去に自分が読んだ本を、具体的なジャンルや書名を挙げて娘や息子にも孫にも勧め、読んだかどうかの確認をし、感想を求める。本項では、読書指南の手紙を参照しながら、指南の意図と目的について考察して行く。まず引用するのは 16 才になったポーリーヌがどんな本を読めばよいのかを教示した手紙である。

Aux Rochers, dimanche 15 janvier 1690

Pour Pauline, cette dévoreuse de livres, j'aime mieux qu'elle en avale de mauvais que de ne point aimer à lire. Les romans, les comédies, les Voiture, les Sarasin, tout cela est bientôt épuisé. A-t-elle tâté de Lucien? Est-elle à portée des *Petites lettres* ? Après, il faut l'histoire; si on a besoin de lui pincer le nez pour lui faire avaler, je la plains. Pour les beaux livres de dévotion, si elle ne les aime pas, tant pis pour elle, car nous ne savons que trop que, même sans dévotion, on les trouve charmants. À l'égard de la morale, comme elle n'en ferait pas un si bon usage que vous, je ne voudrais point du tout qu'elle mît son petit nez, ni dans Montaigne, ni dans Charron, ni dans les autres de cette sorte; il est bien matin pour elle. La vraie morale de son âge, c'est celle qu'on apprend dans les bonnes conversations, dans les fables, dans les histoires par les exemples; je crois que c'est assez. Si vous lui donnez un peu de votre temps pour causer avec elle, c'est assurément ce qui serait le plus utile. Je ne sais si tout ce que je dis vaut la peine que vous le lisiez; je suis bien loin d'abonder dans mon sens.[40]

セヴィニエ夫人は娘を通してポーリーヌに、古代から当代までの、じつに様々な作家やジャンルの本を薦める。デュシェーヌは引用中の La vraie morale de son âge,... の文に「道徳教育は、思索ではなく、良い手本に感心することに基礎を置いている。価値観とは、証明されるものではなく現れて来るものなのだ[41]。」という注釈を付けている。セヴィニエ夫人はこの手紙によって、ポーリーヌがそれぞれの寓話や物語の登場人物について思考を巡らせ、母親と話し合う時間を持てば、正しい道徳観はおのずと彼女の身について行くだろう、という「読書による道徳教育の効果」をも教示しているのである。

又、読書による知育教育効果以外の面で、この手紙から読み取れるセヴィニエ夫人の意図を考えてみよう。読書は人間の思考を造り上げるものであるから、セヴィニエ夫人は娘だけでなく孫娘にも「自分と同一の思考」を持ってほしいと考えていたのではないか。クリスティアーヌ・オリヴィエは、「親は自分と同じ性を持つ子供のうちに、人生のやり直しの可能性を見る。その親は自分自身の過去との関連でこの子供の将来をすでに思い描いている。そして子供を「同一化の計画」のなかに包み込む、さらには閉じ込める。この計画に、子供はその親の要求の多寡に従って、多かれ少なかれ応えることになるだろう[42]。」と指摘する。セヴィニエ夫人は、読書という自らの知的遍歴を追体験させることによって、娘や孫娘にまで、自分の人生のやり直し、乃至自分の人生への同一化を求めていたと考えることができるだろう。

又、引用最後にあるように、自分の方針を具体例をあげて明確に示した後で、結局自分の指示通

りにしてもしなくてもどちらでもよい、というくだりは、母親の常套手段である。「自分の主張の押し付け」のニュアンスを緩和する為に、母親は最終的な決断を娘に任せる。この手段を使われると娘は、母親の方針通りにすべきかどうか困惑し、更に神経をすり減らすのだ。

読書について、教育者達の考えはどうであっただろうか。再びグルナイユとフェヌロンの意見に耳を傾けることにする。神父であった彼らは両者共に宗教書を薦めるが、ここでは、彼らが提示する fable（絵空事、又は寓話）への見解を中心に据えて考えてみたい。

(Grenaille)

Il est vray que pour vacquer à une estude si necessaire, il faut que l'honneste Fille se desgage d'une lecture superflue. Elle doit quitter les fables pour recconnoistre ces veritez. Elle n'a garde de sçavoir plainement l'Histoire si elle feuillette plus les Romans que les Autheurs, dont la foy est irreprochable.Elle n'a pas l'esprit fort solide si elle s'amuse à des contes bien souvent impertinents. Il vaudroit bien mieux ne lien lire, que de lire tousjours des histoires ridicules.[...]La Bibliotheque des filles doit estre composée de deux sortes de volumes dont les uns puissent cultiver leur ame, et les autres polir leur intelligence. Les uns doivnet éclairer leur esprit, et les autres eschauffer leur volonté. En un mot elles doivent apprendre en lisant à estre saintes aussi bien qu'à estre sçavantes.(43)

(Fénelon)

Il faut leur donner un livre bien relié,doré même sur la tranche, avec de belles images et des caractères bien formés. [...]Les enfants aiment avec passion les contes ridicules;on les voit tous les jours transportés de joie, ou versant des larmes au récit des aventures qu'on leur raconte;ne manquez pas de profiter de ce penchant; [...]recontez-leur quelque fable,courte et jolie;mais choisissez quelques fables d'animaux qui soient ingénieuses et innocentes. [...]Il faut tâcher de leur donner plus de goût pour les histoires saintes[...] quoi qu'elles semblent allonger l'instruction,elles abrègent beaucoup et lui ôtent la sécheresse des catéchismes[...]Elle consistait à montrer, par la suite de l'histoire, la religion aussi ancienne que le monde, Jésus-Christ attendu dans l'Ancien Testament, et Jésus-Christ régnant dans le Nouveau, c'est le fond de l'instruction chrétienne.(44)

先ず、グルナイユの『オネットフィーユ』は思春期以降の少女を対象としていると思われるのに対し、フェヌロンの『女子教育論』において読書についての記述があるのは第五章「間接教育」と第六章「子ども達に対する物語の使用法について」においてであり、これらの章の対象年令は児童期であることを断っておかなくてはならない。

グルナイユの言う fable は「絵空事(45)」、つまり小説のことであり、彼はオネットな娘には無益だと考えている。彼が『オネット・フィーユ』を書いた17世紀前半には、小説や演劇は女性にとって「医学的」に危険視され、特に男女間の愛の表象は危険視されていた(46)のであるから、彼が、小説

を読むより「何も読まない方がずっとよい」と考えるのは当然であろう。この点に関しては、ポーリーヌが小説 les romans、戯曲 les comédies を読むことを肯定しているセヴィニエ夫人は、当時の社会の風潮と違った全く独自の意見を持っていたと言うことができるのである。

フェヌロンの薦める fable は「寓話 [47]」を表している。フェヌロン自身も王子の帝王教育の為に、ラ・フォンテーヌを意識した動物寓話や妖精物語を含む『寓話集』(1690) を著しているが、ルイ 14 世治世の時代の寓話と聞いて先ず思い浮かべられるのがジャン・ド・ラ・フォンテーヌ Jean de La Fontaine の『寓話集』*Fables* (1668-95) であろう。フェヌロンの『寓話集』はラ・フォンテーヌを意識して書かれたものである。ラ・フォンテーヌ自身の「寓話による教育の意図」はどのようなものであったのだろうか。彼は『寓話』の巻の六、「羊飼いとライオン」冒頭部分において次のように述べる。

> Les Fables ne sont pas ce qu'elles semblent être. Le plus simple animal nous y tient lieu de Maître. Une Morale nue apporte de l'ennui; Le conte fait passer le précepte avec lui. En ces sortes de feinte il faut instruire et plaire, Et conter pour conter me semble peu d'affaire.[48]

セヴィニエ夫人は上に引用した手紙以外にも、たびたびラ・フォンテーヌの寓話を礼賛する手紙を娘に送っている [49]。ラ・フォンテーヌの寓話は人間のエゴイズムやおろかさへの風刺に貫かれているので子どもの夢をはぐくむ類の作品ではないが、動物を通して人間の生態を描くことがラ・フォンテーヌの目的であったし、その目的にセヴィニエ夫人やフェヌロンも共鳴し、寓話の読書や読み聞かせ、読後の会話を通しての道徳教育効果も大いにあると認めていたと言えるであろう。

おわりに

セヴィニエ夫人の書簡集全体に流れる主題は「全ての愛に対する母性愛の優位性」であるのは誰もが感じるところであろう。しかし夫人自身にとって手紙執筆の最大の目的は、最愛の娘との別離による悲しみや苦悩、娘との間の距離を滅却することであった。

偉大なる書簡作家、且つ教育者ともいえるセヴィニエ夫人を形作った大きな要素は、彼女の境遇であったと思われる。早期に孤児となったことにより広い年齢層の親族達と会話中心のコミュニケーションを充分にとりながら育ったことで、豊かな教養と共に社交性を身につけることができた。又、結婚後若くして未亡人になったことで独身生活を謳歌した。サロンの仲間達や、大の仲良しの友人であるラファイエット夫人とラ・ロシュフコーとの頻繁な交流や情報交換は、互いに持つ知見の贅沢なやりとりになっていたことだろう。以上のような背景から見てセヴィニエ夫人は、当時輩出した女子教育論者の聖職者達に引けをとらない教育論者でもあったと言えよう。

娘へのアドバイスは時に懇願調であり、時に命令調である。娘のグリニャン夫人はプロヴァンス地方の総督補佐官の妻としての任務、そして先妻の娘達を含む 5 人の子供たちの育児や貴族への縁

付けなどの母としての任務をこなしながら、母セヴィニエ夫人への孝心も欠かさず、手紙に返事を書き続けた。娘は、自分を溺愛する母からの直情的で情熱に溢れた文面に、息の詰まるような思いに苛まれることも多かったであろう。

しかし、母は娘に自分の分身たることを望み、自分が成就できなかった夢を託し、結婚後の娘の夫婦関係や親子関係にも介入する、そして娘はこうした母の重圧感に苛まれながらもその期待に応えようと努力する、という姿は、現代の多くの母娘にも容易に投影することができる。セヴィニエ夫人のように一男一女を持ちひとりで子育てをしている母親という存在は、17世紀にしては珍しく、むしろ現代の家庭の母に似ているのだ。

書簡集の中に、今日も絶え間なく繰り返されている母娘関係が少しも色褪せずに存在していることも、セヴィニエ夫人の手紙が絶えることなく愛され読み継がれている所以であろう。

注

本稿は拙論（慶應義塾大学修士論文 2011)）の一部に加筆訂正したものである。

(1) Roger Duchêne, *Chère Madame de Sévigné*, Gallimard,1995, p.83.
前書きの後に収録された、シミアーヌ夫人からアメ・ニコラへの手紙からの引用である。« Lettres de Mme la marquise de Simiane à Monsieur le comte de Bussy en lui envoyant le choix qu'elle avait fait des lettres de Mme de Sévigné. Elle précise les conditions de ce choix et leur intérêt littéraire. » (Duchêne)

(2) Roger Duchêne, *Naissance d'un écrivain Madame de Sévigné*, Fayard, 1997, p.297.

(3) « Vous louez tellement mes lettres au-dessus de leur mérite que, si je n'étais fort assurée que vous ne les refeuilletterez ni ne les reliez jamais, je craindrais tout d'un coup de me voir imprimée par la trahison d'un de mes amis. [...] Et qu'est-ce que vous dites, ma chère enfant? »Aux Rochers, 15 février 1690. Madame de Sévigné, *Correspondance*, I-III, texte établi, presenté et annoté par Roger Duchêne, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1972 (tome I), 1974 (tome II), 1976 (tome III), (以下、*Corr.* と略記) t.III, p.839.

(4) Roger Duchêne, *op.cit.*, p.297.

(5) *Ibid.*, p.255.

(6) セヴィニエ夫人による回想である。« [...]vous disiez que vous étiez prisonnière, que vous étiez une princesse chassée de chez son père... Vous aviez neuf ans. » À Paris, lundi 15 janvier 1674 *Corr*. t.I, p.668.

(7) Jacqueline Duchêne, *Françoise de Grignan, ou Le mal d'amour*, Fayard, 1985, p.11.

(8) « Je n'avais retenu de dates que l'année de ma naissance et celle de mon mariage, mais sans augmenter le nombre, je m'en vais oublier celle où je suis née, qui m'attriste et qui m'accable, et je mettrai à la place celle de mon veuvage, qui a été assez douce et assez heureuse, sans éclat et sans distinction, mais elle finira peut-être plus chrétiennement que si elle avait eu de plus grands mouvements, et c'est en vérité le

principal. »À Paris, mardi 17e juin 1687. *Corr*. t. III, p.300.

(9) « Pour les jeunes veuves, elles ne sont guère à plaindre; elles seront bien heureuses d'être leurs maîtresses ou de changer de maîtres. » Aux Rochers, mercredi 12e juillet 1690 *Corr*. t. III, p.300.

(10) le Ballet des Arts (1663), le Ballet des Amours déguisés (64), le Ballet de la Naissance de Vénus(65)

(11) Jacqueline Duchêne, *op.cit*., p.16.

(12) « [...]Mais la demoiselle était une « insensible » et sa mère, petite-fille de sainte Chantal,avait de solides principes moraux. Les deux femmes s'accordèrent pour résister aux tentations du monde. » Roger Duchêne, *Madame de Sévigné, Lettres choisies*, Édition présentée, établie dt annotée par Roger Duchêne, Gallimard, 1988. p.12.

(13) Jean de La Fontaine, *Le Lion amoureux, in La Fontaine Œuvres complètes I. FABLES ET CONTES NOUVELLES*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1991, p.137.

(14) « La guillerette Sévigné est devenue la mère passionnée et douloureuse d'une fille dont elle aurait voulu faire son double et qui aurait eu les succès qu'elle n'avait pas réussi à obtenir à la cour. Tout avait, semble-t-il, bien commencé. » Roger Duchêne, *op.cit*., p.11.

(15) *Corr*. t. II, p.497.

(16) *Corr*. t. III, p.378.

(17) martyre は前引用文にも動詞 se martyriser (vous martyrisez) で使われ、コルネイユから着想を得ていると考えられる « Le verbe martyriser fait aussi songer à *Polyeucte* recommandant à Sévère d'aimer Pauline (IV, iv). » Duchêne, *Corr*. t. II, p.1335.

(18) *Corr*. t. II, p.283.

(19) Jacqueline Duchêne, *op.cit*., p.311.

(20) Roger Duchêne, *Madame de Sévigné*, Fayard, 2002, pp.260-261.

(21) *Corr*. t. III, p.482.

(22) Fénelon, *De l'éducation des filles* [Texte de 1696], dans *Œuvres*, édit. Par J. Le Brun, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1983, pp.139-149.

(23) Elisabeth Badinter, *L'amour en plus -Histoire de l'amour maternel (XVIIe-XXe siècle)*, Flammarion, 1980. 邦訳はエリザベート・バダンテール『母性という神話』、鈴木晶訳、筑摩書房、1991、121 頁。

(24) Claude Dulong, *La vie quotidienne des femmes au Grand Siècle*, Hachette, 1984, p.121. 邦訳はクロード・デュロン『大世紀を支えた女たち』伊藤洋、野池恵子訳、白水社、1991、126 頁。

(25) *Corr*. t. III, p.607.

(26) *Corr*. t. III, p.584.

(27) Fénelon, *op.cit*., pp.109-111, p.160.

(28) フィリップ・アリエス『〈教育〉の誕生』、中内敏夫、森田伸子訳、新評論、1983、pp.165-172.

(29) « Et l'italien, l'oubliez-vous? J'en lis toujours un peu pour entretenir noblesse. » Aux Rochers, dimanche

7e juin 1671. *Corr*. t. I, p.268.

(30) *Corr*. t. I, p.276.

(31) Bernard Raffari, *La culture de Madame de Sévigné*, Europe-Paris-Revue littéraire, Centre National du livre, 1996, p.70.

(32) *Corr*. t. III, p.727.

(33) François de Grenaille, *L'honnête fille où dans le prenier livre il est traité de l'esprit des filles*, 1640, Édition critique établie, présentée et anotée avec variantes par Alain Vizier, Paris : H.Champion, 2003, p.355.

(34) Fénelon, *op.cit*., p.163.

(35) グルナイユの見解について『オネット・フィーユ』の校訂者アラン・ヴィズィエ Alain Vizier はニコラ・ファレの honnêteté の概念への敬意ではないかと記す « Peut-être Grenaille sentait-il la nécessité de rendre hommage au lieu de naissance du concept moderne d'honnêteté? Faret recommandait aussi la connaissance des langues étrangères (*HH*, éd.1640, p.54). » François de Grenaille, *op.cit*., p.355.

(36) アラン・ヴィズィエはイタリア語学習についてのグルナイユの意見に対し、後にフェヌロンが反論することを示唆している。« Quelque années plus tard,Fénelon exprimera son désaccord avec cette thèse et condamnera l'apprentissage de ces langues au nom des vices qui leur sont irrémédiablement « attachés ». (*De l'éducation des filles*, Œ, I, p.163.) » François de Grenaille, *op.cit*., p.355.

(37) « Vos lectures sont bonnes. Pétrarque vous doit divertir avec le commentaire que vous avez ; celui que nous avait fait Mlle de Scudéry, sur certains sonnets, les rendait agréables à lire. » (Aux Rochers, dimanche 28 juin 1671) *Corr*. t. I, p.280.

(38) « Elle avait la vivacité et l'enjouement de son père,mais beaucoup plus poli. » « Ce ne fut pas le plus grand bien qu'elle fit à Françoise de Sévigné :la bonne nourriture qu'elle lui donna,et son exemple,sont des trésors que les rois mêmes ne peuvent pas toujours donner à leurs enfants. »Marie-Hélène Sabard (Textes réunis par), *Mme de Sévigné vue par des écrivains de Bussy-Rabutin à Philippe Sollers*, L'école des lettres, 1996, pp.68-73.

(39) Jacqueline Queneau, Jean-Yves Patte, *L'Art de vivre au temps de Madame de Sévigné*, NiL édition, 1996, pp.27-28.

(40) *Corr*. t. III, p.810.

(41) « L'éducation morale repose sur l'admiration des bons exemples, non sur la spéculation. Les valeurs ne se démontrent pas; elles se montrent. » Duchêne, *Corr*. t. III, p.1537.

(42) Christiane Olivier, *Filles d'Ève ou la relation mère-fille*, Édition Denoël, 1990. 邦訳はクリスティアーヌ・オリヴィエ『母と娘の精神分析 イヴの娘たち』大谷尚文・柏昌明訳、法政大学出版局、2003、4頁。

(43) François de Grenaille, *op.cit*., pp.366-367, p.375.

(44) Fénelon, *op.cit*., p.110, 118, pp.120-121.

(45) « Fable, chose fausse; Cela sent extrêmement la fable.Parmi tant de fables raconter quelque vérité. » *Richelet*.

(46) 片木智年『少女が知ってはいけないこと』、PHP 研究所、2008、124 頁。

(47) « Fable, Discours qui imite la verité,dont le but est de corriger agréablement les hommes. » *Richelet*.

(48) Jean de La Fontaine, *Le pâtre et le lion*, *op.cit*., p.209.

(49) « Ne jetez pas si loin les livres de La Fontaine. Il y a des fables qui vous raviront, et des contes qui vous charmeront. [...] Il ne faut point qu'il sorte du talent qu'il a de conter. » À Paris, mercredi 6 mai 1671. *Corr*. t. I, p.247.